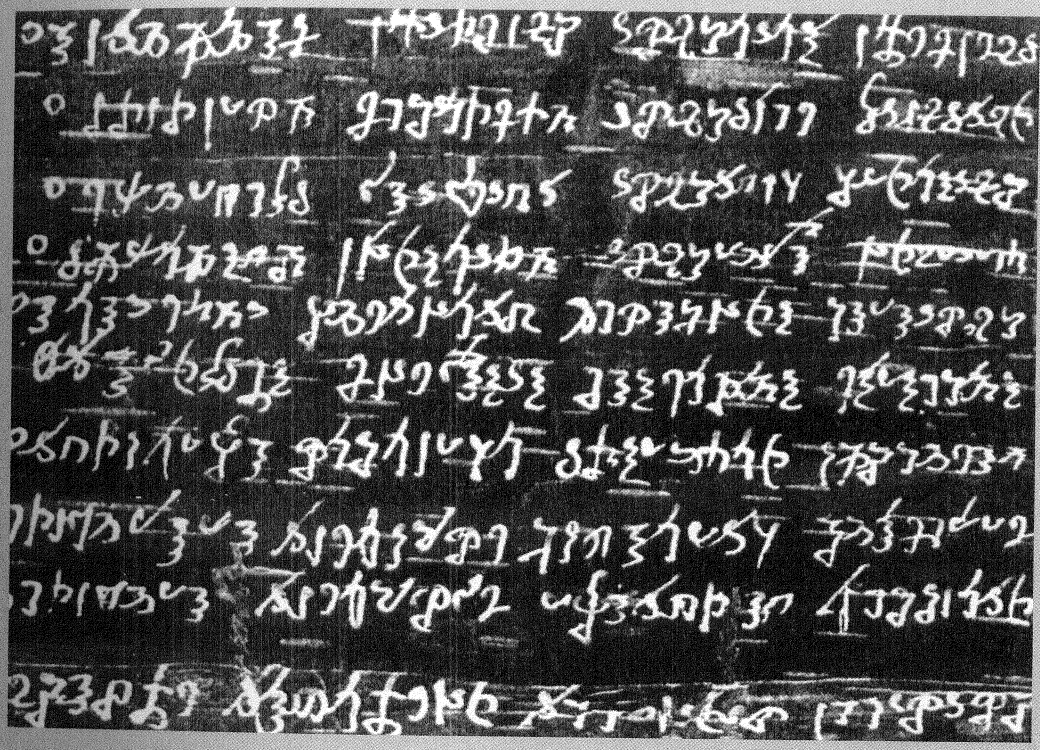
論集

古典学の再構築



平成10年度～14年度　文部科学省科学研究費補助金　特定領域研究(A)118
「古典学の再構築」研究成果報告集 I

総括班研究報告

I

神戸　平成15年3月

1．インド古典学の歴史（古代より中世まで）（Ⅰ）インド学

古典的インド学

後藤　敏文

1．ヴェーダ文献の編集

1.1.　インド最古の文献は，神々への讃歌を中心とする韻文文献『リグヴェーダ』（Ṛgveda）である。個々の讃歌（リチ ṛc）は霊感にうち震える祭官（リシ，カヴィ，ヴィプラ）が「見た」ものとされる。この讃歌を編集収録し，固定したことがインドでなされた最古の古典学的・文献学的営為といえる。中核部分は，リシの子孫たる祭官の各家系において作成・伝承されてきた讃歌の収録から成る。この「家集」の順番と家集内での讃歌の配列順序とは，歌の数，詩節の長さに基づく形式的配列に依っている。さらに，家集の前後に，祭式における使用を意図して集められた讃歌集，補遺的性格の歌集などが付加されて，全10巻計1017讃歌が編集された。この編集に際して，発音上の統一化が図られ，書かれたテキストにおける「正書法」に当たるものが決定されたと考えられる。編集年代としては紀元前1200～1000年が想定される。現在我々が利用することができる伝承（テキスト）は，基本的に，この時に固定（聖典化）された姿に基づくと考えて良い。後に手が加えられたとしても，機械的な処理に留まるものであり，もとの姿を消し去ってはいない。固定・伝承されたテキストは，「続け読み」（サンヒター），つまり，詩の一行を単語に区切らず，続けて発音される形によっている。例えば，第２讃歌の第１詩節は３行からなるが，その１－２行目は *vā́yavā́yāhidarśate-mésómāáraṃkṛtāḥ*（ヴァーヤヴァーヤーヒダルシャテーメーソーマーアランクリターハ）と伝承されているが，単語に分割すると，第１行 *vā́yau ā́ yāhi darśata*（母音を詩作当時の発音形に戻して：ヴァーヤーウ，アー，ヤーヒ，ダルシャタ），第２行 *imé sómāḥ áraṃkṛtāḥ*（同：イマイ，サウマーハ，アランクリターハ）となる：「風よ，こちらへ来い，麗しいものよ。ここにソーマたちが準備されている」。つまり，伝承は，単語の語末と語頭とが音の融合（サンディ「結合」という，→ 2.1.，2.2.）を起こした形で固定されている。韻律から考えると，詩作の本来の姿はサンディの無い形に近い。一語の内部にも「正書法」上の加工が施されている。（１）詩が作られた時の姿，（２）編集された姿，（３）ヴェーダ時代に伝承されていた姿，という３段階が想定されるが，（２）と（３）との間に何らかの操作が入り得たかどうかは明らかにし得ない。伝承は近現代まで口頭に依ったが，（３）で問題にしたヴェーダ時代の伝承段階以後は，原則として全く変化無しに伝えられたと考えられる。今日の研究者は専ら（１）の姿を問題にしており，あらゆる文献学的・言語学的方法を動員してそれを復元するが，その為には，現存の「続け読み」テキストは完全に信頼できる前提を提供してくれる。現行のテキストは，単語に分けても形の変わらない部分については分けて印刷し，便宜を提供している。

なお，この「続け読み」をことばのスタンダード（「正書法」）とする姿勢はその後のサンスクリット語の基本となった。つまり，サンスクリットのテキストには，英語や日本語と異なり，辞書に載っているような単語の形が並んでいない。この為，サンスクリットを学び研究する者は「続け読み」を分解して，単語が並んだ形に復元するという苦労と戦わねばならない。言語が祭官・学者階級の専有物であり，彼らは，正しく発語された時に実現力を発揮する言葉を職業上の道具としていた，という事情が根底に考えられる。

1.2.　リグヴェーダに引き続き，他の祭官グループの文献が編集された。編集は，祭式の整備と平行する形で行われていったものと考えられる。祭式の整備を主導したのは祭式の遂行を執り行うアドゥヴァリュ(「道を辿る」）祭官たちであった。彼らは，自分たちが祭式に用いる祝詞（ヤジュス）を祭式毎に編集・収録し，祝詞の解釈，意義付けを中心に，祭式の次第に関する議論を纏めていった。その文献を「ヤジュルヴェーダ」と呼ぶ。編集が為されて行った順序は，祭式整備の順序とも関連しており，現存のテキストの構成に反映していると考えられるが，その具体的解明は今後の課題である。また，新旧の学派間の問題がこれに絡む。ヤジュスを始めとする祭式用詩句（マントラ）と散文による議論の部分とを同一文献中に章を分けて編集する黒ヤジュルヴェーダ（マイトラーヤニーヤ派，カタ派，タイッティリーヤ派）と，両者を別の文献に分けて編集する白ヤジュルヴェーダ(ヴァージャサネーイン派）とに二大別される。全体としてはマイトラーヤニーヤ派とカタ派の文献が先行し，タイッティリーヤ派の時代に整備と体系化，および議論の深化が進み，白ヤジュルヴェーダ（ヴァージャサネーイン派）が大きな展開を遂げたものと推測できる。黒ヤジュルヴェーダの議論（「ブラーフマナ」）部分は前800年頃にまで遡る。ヴァージャサネーイン派が独立の文献として編集した「ブラーフマナ」はシャタパタブラーフマナであるが，前650年頃を中心に作成されたものと考えられる。これらヤジュルヴェーダ文献については，成立時期と編集時との間に基本的に差が無く，しかも，編集時の姿が今日にまで伝わっていると考えて差し支えない。

讃歌，祝詞，歌詠などの韻文部分(マントラ『真言』）の作成年代は，編集時よりも遡るものが多い。歌詠の為のテキストである「サーマヴェーダ」は殆どがリグヴェーダからの借用であり，固有の部分についてもテキストとしての積極的価値は少ない。上記ヤジュルヴェーダに収められたマントラ（ヤジュス）にはリグヴェーダに次ぐ時代，およそ前1000年頃が想定される。医療，呪いなどの呪文を中心とする「アタルヴァヴェーダ」の中核部分の言語もほぼ同時代の特色を示す。各文献の編集固定の下限については難しい問題が残り，各ヴェーダごとに，更には，その中の学派ごとにかなりの差が認められる。

1.3.　上述の黒ヤジュルヴェーダの散文部分に引き続き，白ヤジュルヴェーダの『シャタパタブラーフマナ』のような，「ブラーフマナ」という名を冠するテキストが各ヴェーダ学派において編集されていった。これらのテキストの中には，古典学的・文献学的検討の萌芽を示すものが見られる。韻律に関する言及とその意義付けは特に発達している（→ 2.5.）。韻文・散文のマントラや特定の単語の音節数に関する議論も見られる。発音・音韻に関する議論には未だ見るべきものが殆ど無い。ブラーフマナに直接引き続いて成立した文献が，よく知られている「ウパニシャッド」であり，祭式の文脈から離れた普遍的議論に足を踏み入れている。この文献の中に，音節に関する議論の進展を窺わせるものが見られる。B. Liebich, Zur Einführung in die indische einheimische Sprachwisenschaft II (1919), H. Oldenberg, Die Hymnen des Ṛgveda, I. Metrische und textgeschitliche Prolegomena (1888) などに具体的な事項への言及や更なる文献への指示が挙げられている。

ブラーフマナ文献の編集末期頃，リグヴェーダの「単語読み」テキストが作成された。この作業を行った「最初の文献学者」はシャーカリャという名で伝えられている。ここに，リグヴェーダの「続き読みテキスト」(サンヒターパータ）と「単語テキスト」(パダパータ）とが完成した。他のヴェーダにも単語読みテキストが伝えられているが，何れもリグヴェーダのそれに倣ったものと考えられる。リグヴェーダのテキストには二つの異なった「読み方」のヴァージョンが得られ，更に，単語の順序を並べ替えたり，繰り返したりして唱えることにより，もとのテキストの読みを失わない工夫が可能となった。最も簡単な方法はクラマパータ「順番読み」で，分けられた単語を順に１，２，３，４... とすると，１２，２３，３４，４５，... と唱えるものである。１と２等の単語の間には続け読みの規則が適用される。そのような規則は「プラーティシャーキャ」(→ 2.2.）が定めるところとなった。よく用いられるジャター「結い上げ髪」という方法は：１２２１１２，２３３２２３，３４４３３４，... である。離れた位置にある単語と組み合わせたり，戻ったりを繰り返す複雑な読み方が多数ある。これらの諸ヴァージョンを暗記していれば，霊力をもった「続け読みテキスト」が錯誤による変更から完全に護られて還元できる。アクセントも正確に伝えられた。興奮から複合語のアクセント位置を取り違えてマントラを唱えたため，意味が変わってしまい，困難を呼び込んだ話が，既にブラーフマナに語られている。実際の学習では，師(父）が弟子（子）の後ろに立って頭を抑え，弟子の頭を車のギヤチェンジのように動かして，体によって高－低－降下のアクセントを習得させる。上記の，単語の順

を入れ替えた特殊な読みに於いても同じであり，アクセントも組み合わせにより変化することが，かえって元の読みを守る為に役立っている。

2．ヴェーダ補助学

ヴェーダ文献の本体を成す文献群に引き続き，ヴェーダ学派の付属文献が編集されていった。多くの場合，「スートラ」という名のテキストとして編集された。「スートラ」は「糸」の意味で，「手引き，綱要書」を意味する代表的用語である。伝統的に漢訳仏典に倣って「経」と訳される。それらの中，最も古いのは「シュラウタスートラ」で，大家長を祭主とし，部族全体に関わる事柄や，宇宙の運行等に関する大規模な祭式の執行次第を祭官用に定め教えるものである。次に，「グリヒャスートラ」（一般家長の一生に伴う儀礼を中心とする「グリヒャ祭式」の綱要書，『家に関する（祭式の）手引き』。祭式整備と文献編集は前400年頃，即ちゴータマ・ブッダの活動期頃を中心とすると考えられる），「ダルマスートラ」（家長の義務，共同体の規範等を定める『法経』），「シュルヴァスートラ」（祭場設営の為の測量を教える『紐の手引き』），「ピトリメーダスートラ」（葬礼の手引）などが順次編集・固定されていった。これらをインドの後の伝統では「カルパスートラ」（典礼書）と総称することがある。更に，カルパスートラに，1）シクシャー（発音「教本」），2）ヴィヤーカラナ（文法：語形とその意味の派生法），3）ニルクタ（語源学），4）チャンダス（韻律学），5）ジョーティシャ（天文学）を加えて，ヴェーダ補助学（ヴェーダーンガ）として列挙する伝統がある。ただし，2）－5）にはヴェーダ学派との関連は事実上見られない。これらには属さないが，ヴェーダ学派に属する重要文献として，各学派のマントラを正確に発音する為の音韻規則を統一した「プラーティシャーキャ」（「各学派毎の書」の意）がある。以下，これらの中「古典インド学の歴史」に直接関わるものに触れる。ヴェーダ文献群全体の一覧表としては，辻直四郎『インド文明の曙』の付録3が便利である。ヴェーダ学派に付属する文献，写本の総覧としてはK.P. Aithal の Veda-Lakṣaṇa（Stuttgart 1991）がある。

2.1. 文法学

「文法学」に当たる語はヴィヤーカラナ（vyākaraṇa）で，この語自体は「（個々の形へと何かあるものを）形成・展開・派生すること」を意味する。つまり，具体的な語形の形成方法と，語形を構成する諸要素が複合・構成して表すことになる語形の意味とを教えることを目的とする，一種のプログラミングの体系である。「プログラミング」の要諦は最短距離で目的地たる語形に辿り着くことであり，一つ一つの規則は一音節たりとも無駄を省いた短い「式」から成る。（「一音節」と書いたが，「規則を半音節縮められれば，我が子の誕生よりも喜んだ」と伝えられている。）また，複数の規則を一括して取り扱うことができるよう，一種の記号が多用されている。我々がいう「文法，文法学」とは異なり，音韻，形態（語根，接尾辞，語尾），統語論等の次元を分けての言語の「分析」を目指すものではない。

パーニニ（Pāṇini）の『8つの学習から成る書』が最古にして事実上唯一の体系であり，今日に至るまで，伝統文法学の権威的位置にある。パーニニの絶対年代は知られないが，前380年頃を中心に西北インドに活動したものと一般に考えられている。状況からしてアケメネス朝ペルシャの統治に関わった学者階級の家系に属する筈である。また，時代的にゴータマ・ブッダの活動時期に近いことも意識しておく価値がある。パーニニ自身の言及から，それ以前に伝統があったことが窺われるものの，今日まで伝わる文法学は，彼の完成した体系から始まっている。彼より約100年後に東インドにカーティヤーヤナ（Kātyāyana）が出て，パーニニ文法の不備を補おうとしたが，更に約100年後にパタンジャリ（Patañjali）が『大注釈書』を著し，基本的にパーニニの規定を過不足無い権威として固定する方向で「パーニニ学派」の文法が完成した。これら3者を文法学の「3聖人」と呼ぶ。パーニニが取り扱った言語は当時の教養人の「口語」を中心とし，およそシュラウタスートラからグリヒャスートラに懸けての言語段階の古風な層に当たる。ヴェーダの「雅語」をもかなり広範囲に収録している。我々が普通「サンスクリット」と呼ぶ「古典サンスクリット語」は，遙かに時代の下るグプタ朝（紀元後320年から300年間）の復古運動に帰せられる要素が大きいが，パーニニが規定するのは紀元前4世紀初めの生きた言語である。例えば，パーニニの規定中に見られる高低アクセント，動詞活用の接続法などは古典サンスクリットにはない。それにも拘わらず，古典サンスクリットを用いる学者階級は，自分たちの言語をパーニニ文法に添ったものと意識し，主張してきた。彼らが用いる言語は中期インドアーリヤ語を経過した上で，古インドアーリヤ語の姿に移し替えられたものであると言える。その際，音韻組織や活用の主体系を中心に，古いパーニニ学派の文法に範をとったものと言えよう。同文法は，必要